

国際日時標準線の交点に、**円形の鏡**が磨き出された。

自らの顔を、この鏡にうつして、後に、この鏡は撞かねばならぬ。

敵は、これを、攻めることによつては亡びず、己を知ることによつて、消える。

鏡の中心が位置する、経度・緯度、共に零度の点。精神のこの地点からこそ、国境のない世界が開くのである。

自己を知ることの極みは、自己が零となること。その時、宇宙が、自己となる。

死ぬべき自己が死んで、死ぬことのない自己が生れる。

この生命の転換を表現して、この鐘は、赤道と、国際日付変更線（緯度一八〇度）との交点に、**原子模様の撞き座**を持つ。

ここに撞木が当つて、この鐘の魂が、十方に響きわたるのである。

社会的存在の原子は、自己であり、その核は、自我心である。

自我心とは、自己が、あくまでも自己であろうとする力、すなわち、生きようとする

る盲目の意志を意味する。

この意志は、盲目であるから、自分が死ぬものであることを知らない。

にもかゝらず、ただひたすらに、死ぬことを恐れる。

死なないためには、殺さねばならぬ。

殺されないためには、より強力な武器を必要とする。

こうして、人類は、遂に、原水爆を作り出してしまった。

たとえ、自滅をまねかれるために、その禁止を絶呼したとしても、原因を除かずに、結果だけをさけることは出来ない。

原水爆の廃棄は、それを作り出した盲目の意志を克服する他に、方法はないのである。

歴史は、人類の開眼を迫っている。

「すべての国の、すべての人人をして、永遠絶対なる自己に、目覚めしめずには